

## ヒュームの政治思想：「理性」と「穏和な情念」との関連において

鎌田，厚志  
九州大学大学院法学研究科博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/22987>

---

出版情報：政治研究. 58, pp.127-146, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

## 研究ノート

ヒュームの政治思想

―「理性」と「穏和な情念」との関連において―

鎌田 厚志

はじめに

第一節 ヒュームの因果関係論における「理性」

第二節 「穏和な情念」と「理性」

第三節 現実と対峙する人間学

結論

はじめに

本稿の目的は、ヒューム (David Hume, 1711～1776) の政治思想が、「理性」と「穏和な情念」という人間学の探究から得られた見地に基づき、当時の歴史的現実を批判する性格だったことを分析し、単なる現状追認や現状維持にとどまらないものだったことを明らかにすることにある。

ヒュームの政治思想は、通史の上では従来、保守的な政治

思想、つまり現状を追認・肯定するものであると主にみなされてきた。ヒュームを保守的な政治思想として位置づけた通史の事例としては、福田歓一やポーコックを挙げることができよう。福田歓一は、社会契約思想は人間が作為的に政治秩序を構成する主体性を有していたのに対し、ロック後はそうではなくなつたと十八世紀イギリス政治思想を位置づけた。

その代表的思想家としてヒュームを挙げ、ホッブズ・ロックによる主体的な政治思想はルソーに受け継がれていったと政治思想の流れをとらえている。<sup>(1)</sup>ポーコックは十八世紀のイギリス政治思想を「徳から作法へ」と、商業経済の勃興に対応して移行した時代として概括し、ヒュームの「両義性」、つまり近代に勃興した商業社会を肯定的にとらえ擁護賛美する側面と公債論に見られる当時の政治社会の危機についての悲観的・批判的認識とのヒュームの二面性について注意を払いながら、ヒュームの現実への悲観的な発言は、時代の危機の中でのひとつの証言としてのみとらえられている。<sup>(2)</sup>

通史におけるヒュームを保守主義ととらえる理解に対し、ヒュームの個別研究の積み重ねはより詳細なヒューム政治思想の検討や分析を通して、かつてトリーと位置付けられていたヒュームの政治思想が、必ずしもトリーではないことを示した。だが、全体としてヒュームの政治思想の現状維持

的側面を強調することにより、通史の位置づけを補強するものであったと言える。ヒュームの個別研究においては、かつては別個に研究されることが多かったヒュームの哲学における主著『人間本性論』と政治・経済に関して論じられた『エッセイズ』および歴史についての著作である『イングランド史』の連関を見ていく研究が、一九七〇年代以降に行われ、二〇世紀前半まではトリーと単純に思われていた従来のヒュームのイメージは大きく変わってきた。

一九七〇年代に、フォーブズがヒュームを「懐疑的ウィットグ」<sup>(3)</sup>としてとらえる解釈を示した。これは、ヒュームをトリーではないとし、歴史的文脈からヒュームの意図を再現したものである。つまり、ヒュームは政治学の世俗化を進め、『人間本性論』第三篇において展開されるコンヴェンションの議論に基づく正義論を展開し、穏健な人々に訴えて、名誉革命後の確立された政権に対して、従来の政治思想では得られなかった知的基礎を与えようとしたものだったという解釈である。フォーブズは、ヒュームは不偏不党の立場から、すでに確立されている政府の利益のために、中庸(moderation)を促進しようとした「懐疑的、科学的ウィットグ主義」だったと解釈する。その立場から、ヒュームはボリングブルックらのカントトリーの思想家たちが掲げる「古来の国制」論を批判

し、名誉革命体制を擁護したと解釈する。

このフォーブズの解釈を坂本達哉はさらに発展させ、ヒュームの思想を文明社会の分析として一貫して把握し、近代の商業社会において、勤労・知識・自由が相互に連鎖し自律的に発展する姿を描いたものとするヒューム解釈を示した。<sup>(4)</sup>

また、犬塚元は、ヒュームを国制論・機構論の面からとらえ直した。つまり、ヒュームの政治思想においては、「自由」は「法の支配」の達成と「政治機構において政治権力の抑制が制度化された高次の状態」の二段階からなるものとして把握されており、その達成がイングランドでなされたこととされ、自然法学と政治機構論の二つの政治学の伝統が統合されていたと解釈した。<sup>(5)</sup>さらに、森直人は、従来「両義性」として片づけられてきた、社会の不安定性へのヒュームの指摘に着目し、ヒュームが法学論的な「正義」のみでなく「統治」の重要性を強調した政治学的思考を展開したものと指摘した。<sup>(6)</sup>

フォーブズを踏まえたこれらの先行研究は、必ずしもヒュームを保守主義と概括したわけではないが、主にヒュームの文明社会や政治機構に対する現状分析的な性格に焦点を当て、現状維持や保守というヒューム政治思想の姿を明らかにしてきたと言える。

もちろん、哲学と政治学の連関を見落としていたフオーブズ以前のヒューム解釈（たとえばラスキにおける「建設的努力をなしえなかった」「彼の天才は本質的に言ってその破壊力にあつた」<sup>(7)</sup>）といった解釈）に比べれば、これらの先行研究はヒュームを総合的に見る視野を提示するものであり、筆者も基本的に同意するものである。

ただし、これらの先行研究においては、『人間本性論』における哲学的議論とヒュームの『エッセイズ』における政治経済学的議論の連関は、主に『人間本性論』の第三篇のコンヴェンションに関連して述べられている。コンヴェンションに着目するこれら先行研究はヒュームの政治思想の解明において大きな意味を持つものであるが、本稿では、法学的議論である第三篇ではなく、『人間本性論』第一篇「知性篇」および第二篇「情念篇」に着目し、そこにおいて展開される「理性」と「穏和な情念」が政治学に適応された場合、どのような意味を持ったかを分析する。なぜならば、ヒュームは『人間本性論』において確立した「理性」と「穏和な情念」(calm passion)の議論を基礎としたうえで、『エッセイズ』において「穏健さ」(moderation)を強調し、戦争や党派対立を引き起こし激化させる「激しい情念」を避ける政治思想を確立したと筆者は考えるからである。本稿では、『人間本性論』の「理

性」と「穏和な情念」は、ヒュームの政治思想の基礎であり、その結果としてこれらの思想的要素はヒュームの現状批判・現実対峙的な政治思想の根拠となったことに着目する。

そのために本稿では、第一節では『人間本性論』における「理性」の性格を吟味し、第二節では「理性」と「穏和な情念」の二つの概念の関係を注目し、第三節では、当時のヒュームを取り巻く歴史的文脈との関連からヒュームの『エッセイズ』の公債論等を分析する。

従来「両義性」として片づけられてきたヒュームの文明社会に対する楽天性・悲観性は、実は一貫した社会の穏和化を目指すヒュームの戦略に基づいたものであった。

（本稿においては、『人間本性論』は *A Treatise of Human Nature*, Second Edition revised by P.H.Niddich, Oxford University Press (1978) を使用し、文中「T」と省略して頁数を示した。（文中『人間本性論』の引用文は筆者の訳によるが、大槻春彦訳『人性論』一～四巻（岩波文庫）を参考している。）『エッセイズ』については *Essays, Moral Political and Literary*, ed by Miller, Eugene F., Revised Edition, Liberty Classics (1985) を使用し、文中「E」と省略して頁数を示した。）

## 第一節 ヒュームの因果関係論における「理性」

ヒュームが「理性は情念の奴隸」(T.415)と述べたことはあまりにも有名である。この言葉があまりにも有名となり過ぎ、ともすればヒュームは理性を否定した懷疑論者と受けとめられてきた。実際には、ヒュームは人間の理性についてどのような位置づけをしているのか。結論から言えば、ヒュームにおける「理性」は、誤った因果関係の判断を正しい認識に改め、人間の行動を変える大きな役割が与えられていた。

ヒュームは『人間本性論』の各篇の冒頭に「経験的論究方法を道徳的主題に導入するある試み」と記している。『人間本性論』は全篇この経験的論究方法で貫かれている。『人間本性論』の「序文」においてヒュームは、全ての学問は人間本性に関係を持つのであるから、直接これらの学問の「首都中心」『人間本性に進軍』し、諸学の完全な体系を新しく人間学という基礎の上に打ち立てることを提案する。さらに、人間学が他の学問の唯一の基礎であるように、人間学の唯一の基礎は経験と観察 (experience and observation) に置かれねばならないと述べる。経験と観察に基づく「経験的論究方法」とは、人間のあらゆる観念を印象に還元できるものとし、想像によって連結されたさまざまな観念を、印象つまり経験に

遡って吟味することを第一に意味した。

「すべての人間精神における知覚は、二つの異なる種類に分解される。その二つを私は「印象」(impressions)と、「観念」(ideas)と呼ぼう。その違いは、それらが心を打ち、思考あるいは意識へ入りこむ時に伴う力 (force) と生氣 (liveliness) の程度にある。最も力と激しさを伴い入ってくる知覚を印象と名付けよう。そして、この名のもとに、私は初めて精神 (soul) に現れるあらゆる感覚・情念・情動を包含する。また、観念をもって、思考や推論におけるこれらの淡い影像を意味させよう。」(T.1)

ヒュームは、初めて出現する観念は全てその印象に対応すると述べる。印象は常に対応観念に先行しておりその反対の順序では決してあらわれない。ヒュームは、こうして人間本性の全体系の基礎をさだめたのち、想像 (imagination) の働きに考察の焦点を絞る。ヒュームは、観念には二種類があると述べ、「記憶」と「想像」の二つの観念を挙げる。

この区別には二つの基準があり、まず生気の度合いが強い観念が「記憶」、弱い観念が「想像」だとする。二番目の区別基準は、想像は根源的な印象と同じ順序・形式に由来されな

いが、記憶はこの点で束縛されていて、変化の能力を持たないということである。記憶は対象の原型を保存するが、想像は自由に観念をくみ変えることができる。この「観念を置き換え、変化させる想像の自由」(二二)ということが人間本性の科学の第二原理であるとヒュームは述べる。想像は、記憶に比べて自由に観念を組み替えることができるが、それゆえに想像は事実と関係のない錯誤と誤謬の源になる。

ヒュームは、想像の機能つまり観念の連合は全くの偶然によるわけではないとし、観念連合の原理を三つ挙げる。「類似」(resemblance)、「接近」(contiguity)、「因果」(cause and effect)である。この三つによって、観念連合、つまり心を一つの観念から他の観念へ伝えることが起こるとする。この三つの関係の中では、因果性が最も広い作用範囲を有する。ひとつの事物がほかの事物の存在の原因である場合のみならず、活動・運動の原因であるときも二つの事物は因果関係にあるとみなされる。

問題なのは、人間がこの「想像」の機能において、安易に一方の事物と他方の事物を結びつけてしまい、必ずしも正確な因果関係の認識に結びつかないことである。ヒュームは、知識を絶対的知識(knowledge)と蓋然的知識(probability)に分ける。絶対的知識とは、観念間の比較にのみ依存する知

性であり、いわゆるア・プリオリな知識を指す。蓋然的知識とは、単なる観念にのみ依存するわけではなく経験の変化によって変化する知識を指す。

因果性はこのうち、蓋然的知識であり、かつ最も考察に値する主題だとする。なぜならば、感覚へ直接現れたところを超えて推論させるのは因果性のみであるからである。因果的観念のみ、ある事物の存在あるいは活動から、何かほかの事物が伴い、あるいは先行することを確信させる。つまり、因果性は人間の判断や行動において決定的に重要な観念である。観念間のみの世界における思考ではなく、現実世界に関わる思考をするには、因果性の観念が不可欠であるとされる。

ヒュームは推論(reasoning)つまり理性(reason)の行使において因果性が果たす決定的な役割を指摘し、経験的論究方法を駆使し因果性の観念を吟味し、因果関係を「恒常的連接」(CONSTANT CONJUNCTION)として提示する。恒常的連接とは、似たような事物がこれまで常に似たような接近・継起の関係におかれていたことをのみ意味する。さらに、経験―恒常的連接の回想が、原因あるいは結果の観念を生むのは、理性と想像のどちらの働きによるかを問い、理性は決して一つの事物と他の事物の必然的結合を明示することができないと述べ、一つの事物から他の事物の観念・信念へ心を

移行させるのは、ただの想像であると結論する。想像が事物を結合しない限り、我々は因果間のいかなる結論もできず、いかなる信念も持ち得ない。因果的推論は想像が観念を連合する働きに基づく。

ヒュームは、因果的推論は恒常的連接の観察経験に基づいて、想像が生み出す意見・信条であるということを明らかにしたのち、信念の考察にとりかかる。ヒュームは、信念と不信の違いは観念に伴う生気の程度の違いのみに由来するとする。そして、何が観念に活気を付与するのかと問う。

ヒュームはその答えを現在の印象だとし、あらゆる印象は関連する観念を心に運び来るだけでなく、勢いと活気をそれらに伝達すると述べる。かつ、ヒュームは、信念は理性あるいは想像のいかなる新しい作用もなしに直接起こると述べる。なぜなら、我々はそのような何らの作用も意識せず、見出すこともないと述べる。ヒュームは、新しい推論や判断なしに過去の反復から生ずる全てのことを習慣 (custom) と呼ぶ。習慣とは、意識せずに起こる、いわば暗黙知の領域のことである。また、単なる観念の反復が次第に、その観念に活気とその観念を持つことへの容易さを与えると指摘する。

以上のヒュームの議論は、たしかに、因果観念に関する根底的な懐疑であり、人間の判断が実のところ習慣に基づいた

ものであることを指摘するものである。だが、ヒュームはこのようなにも述べる。

「しかし、教育は人工的原因であって自然的原因ではなく、その確率 (maxim) は頻繁に理性に反し、違う時と場所においてははそのもの自身さえもが相反しており、実際には原因と結果における私たちの推論と同じく習慣と反復に大半は基礎を置いているのではあるけれども、哲学者によつては価値ある根拠としては認められないのである。」(T.II7)

ヒュームは実経験という自然的原因に基づいた習慣は尊重しているが、教育という人工的原因には不信を露にしている。これは、ヒュームが習慣をそのままに肯定するものではなく、特に人間社会における習慣や政治的イデオロギーや信念の教育に対しては、そのままでは承認できないし懐疑的検討を要するとしていたことを意味する。

ヒュームは蓋然的知識を二つに分ける。「偶然」(chance) に基盤を置くものと、「複数原因」(causes) から起こるものである。ヒュームは、偶然是因果性の否定であると述べ、続けてこう述べる。



「哲学者によって通常甘受されていることであるが、大衆 (the vulgar) が偶然と呼ぶものは、密かな、隠された原因以外の何物でもない。」(T.130)

つまり、実際は偶然ということは存在せず、常に存在するのは何らかの原因だということである。ヒュームは、何かにある物が伴うとしても、頻繁に違う事例が見いだされる場合は、我々は第二種の蓋然的知識に導かれるわけで、そこには経験と観察の「反対」(contrariety)があると述べ、この反対に対する扱いが大衆と哲学者を区別すると指摘する。

「大衆は、物事を最初に現れた姿によって受け取るものであり、物事の作用においてなんの障害や妨害がないものを経験した場合であっても、原因の通常の影響がしばしば失敗するとみなして、出来事の不確実性を原因における不確実性に帰する。しかし、哲学者は、ほとんど自然のあらゆる部分においてとても多様な原因と原則が含まれており、またそれらが隠されていることを、微細で遠く隔たったことまで推論する理性によって観察し、少なくとも出来事の反対は原因における偶然性から起こるのではなく、秘められた反対原因の働きからだという可能性を見つけ出す。」(T.132)

ヒュームは、例として、農夫は柱時計が動かない場合、うまく動かないということ以外の理由を挙げることができないのに対し、時計工はバネや振り子の動きが正常であれば塵が入って日ごろの結果をもたらす損ねていると容易に推測できるということを挙げる。ヒュームは、こうした複数原因による哲学的な蓋然的知識に対して、非哲学的な蓋然知識というものを挙げる。この非哲学的な蓋然知識は、いわゆる「偏見」(prejudice)を帰結するとする。

だが、人間は偏見をそのまま持ち続けるのではなく、最初の判断を適切に懐疑することで克服することができるとヒュームは述べ、比較考量つまり理性の働きに大きな力を与える。

「ある事物が現れるとき、それがとても多くの事情においてある原因に類似していると、その原因から最も実質的で有効な事情においては異なっているにもかかわらず、その想像は自然にその通常の結果の概念(conception)に生き生きと我々を運ぶ。ここに一般的規則の第一の影響がある。しかし、我々が精神のこの活動を再考し (take a review)、より一般的で信憑性のある (authentic) 知性の働きの比較する時、我々はそれが不規則な性質であることを見出し、推論における最も



確立された諸原則に対して破壊的であることを見出す。これが、それ（一般的規則の第一の影響——筆者補足）を我々が拒否する原因である。これは一般的規則の第二の影響であり、前者を非難することを含む。その人物の性質と性格によって、ある時には一方が、ある時には他方が優勢となる。大衆は通常第一のものによって導かれ、賢者（wise men）は第二のものによって導かれる。」（T.149～150）

「哲学者」と「大衆」という二つを分けるものは、偏見を自らは正しうるか否かであった。

ヒュームは、人間の理性の能力に対してもろん過剰な期待はしていないものの、全く否定的というわけでもない。人間は一方で習慣によって偏見や誤った認識や判断を持ったまま流されてしまう危険性があるが、その一方で適切な懷疑や理性の行使により誤った判断を克服できるものとして描かれている。多くの場合、人間の判断はたしかに経験や習慣によって生じる想像・信念の領域であり、必ずしも正確な事実に即したものと限らない。しかし、経験的論究方法によって誤謬を正すことができる理性の持ち主として、哲学者にもなりうる存在として、ヒュームは人間を描き出した。

## 第二節 「穏和な情念」と「理性」

前節では、『人間本性論』の第一篇「知性篇」を辿りながら、人間の因果判断・信念は習慣に基づくものではあるが、理性には誤った信念を正してさらに正確な原因を把握する力があるとヒュームが述べていることを見た。本節では、『人間本性論』第二篇「情念篇」を辿り、実際に人間の行動をつくり出す情念と理性の関係を見る。

「はじめに」でも述べたが、先行研究においてはフオーブズ以降、『人間本性論』の第三篇「道徳篇」において展開されるコンヴェンションの議論と『エッセイズ』等で展開される政治経済の議論の連関を指摘するものが多い。その中であって、佐々木毅は、ハーシュマンの示唆を受け、『情念篇』を中心に『人間本性論』やその他のエッセイを読み解くことを提起した。<sup>(9)</sup> その点では大きな示唆に富み、本稿も影響を受けているが、ハーシュマンや佐々木毅においては、ヒュームにおける「知性篇」「情念篇」の中の理性の契機はあまり考察対象とはなっていない。舟橋喜恵は、『人間本性論』の「情念篇」でヒュームが指摘した、人間の心の活動の斉一性・必然性の認識が、人間の科学として政治・社会を規則的に観察できるという認識につながっていることを指摘している。<sup>(10)</sup> その点で、「情念篇」

とヒュームの政治・経済学との関連を指摘していると言える。しかし、人間本性の画一性の認識が科学的な現状分析に結びつけたことの解明に主眼が置かれている。本節では、「情念篇」における「理性」や「穏和な情念」の議論を吟味し、穏和な情念が激しい情念を抑える強い力を持ちうることをヒュームが述べていることを明らかにする。

ヒュームが『人間本性論』第二篇「情念篇」で主張することは、情念のみが人間の行為の動機であり、理性は決して動機にはなりえないということである。理性的ではなく情念に駆られる人間の「非合理」の発見は、十七、十八世紀以来ヨーロッパに強く存在する思想潮流であり、ヒュームはその中で最も大きな影響があったものとされる<sup>11)</sup>。

しかしながら、ヒュームは必ずしも理性を否定していないことは、前節において指摘したが、この「情念篇」においても、ヒュームは以下のような議論を展開する。

まず、ヒュームは、前節でも述べた経験的論究方法において重要な出发点となった「印象」を、身体的快苦に伴う始原的印象と、その再現およびなんらかの観念の媒介によって生じる二次的で内省的な印象に区分する。この後者が「情念」(passion)であり、さらに情念は穏和な情念と激しい情念に

区分できるという。

ヒュームは、人間は共感によって、他人の持っている情念への観念を印象に変化させて抱くことができるとする。ヒュームの言う共感とは、情念の一種ではなく、情念伝達の原理である。人間は比較・共感によってさまざまな情念を起こし、情念の連鎖を起こす。

こうして起こるあらゆる情念の中にヒュームは意志を含まない。ヒュームは意志の自由は人間にはないと述べる。外的な物体の作用が必然的であることはすでに広く承認されていることだし、人間の心の活動も、動機や気質や環境と恒常的接合を持つており、外的物体と同じ必然性を持つと述べる。人間の行動に関して、その動機や気質や環境との恒常的連関を観察できれば、人間は人間の行為に関して必然性を発見することができるし、実際に我々の社会生活はそのような認識に基づいて営まれているとする。

ヒュームは、上記の議論を進めて、意志の自由を「自発性の自由」(暴力の欠如)と「無差別の自由」(必然性の否定)の二種類に分け、前者は支持するが、後者は否定する。こうしたヒュームの立場は、全ての出来事が因果的に決定されていることを認めながらも、他人の強制や外的障害がなく、行為の決定要因が行為者の意志にあるとき、その行為を自由と

みなす「やわらかい決定論」に区分でき、選択の自由や行動の自由を排する「かたい決定論」とは異なるものと言える<sup>(12)</sup>。

上記の自由と必然の立場に立った上で、ヒュームは情念と理性の関係について以下のように述べる。

「情念と理性の闘争について語ること、理性を愛好し、理性の指示に従うことのみ人間にとつて道德的であると主張することほど、哲学において、および通常の生活において、ありふれたことはない。あらゆる理性的な存在は、理性によつて行動を規制すべきだと言われる。∴（中略）∴すべてのこの哲学の誤謬を示すために、私は第一に、理性だけでは決して意志の活動の動機とならないこと、第二に理性は意志の方向性において情念に反対することはできないことを証明することと努めよう。」（T.413）

第一の点について、ヒュームはまず「知性篇」で論じた内容を踏まえ、知性は二つの異なった仕方で発動するとする。

つまり、観念間の抽象的關係を眺める絶対的知識か、事物間の経験によつてのみ知られる關係を眺める蓋然的知識かのいずれかである。前者は行動の原因とはなりえず、後者のみ行動の原因となるとする。蓋然性に基づく因果判断は、人に快

苦の見通しと、それによる嫌悪あるいは傾斜の感情を与える。

「我々がある対象から快苦の見通しを持つとき、嫌悪あるいは傾斜の結果としての感情(emotion)を感じること、およびこの不快あるいは満足将我々に与えるであろうことを避けた受容(embrace)するように運ばれることは明白である。その感情がそこにとどまらず、あらゆる側面に我々の視点を運び、因果関係によつて何であれ事物はその元のもの(original one)と関係があると理解することまた、明白である。そしてここに、この関係(因果関係——筆者)の発見に推論・理性の行使(reasoning)が生じる。さらに、我々の推論・理性の行使が変化することによつて、我々の行動は結果として変化を受ける。しかし、この場合において明らかであるのは、その衝動は理性から起こるのではないということ、ただ理性によつて方向を示されるのみだということである。」（T.414）

もしある事柄の原因および結果がべつに我々の感情を喚起しないものであれば、いかなる事物が原因であり結果であるかを知ることについて、我々は関心を持たない。理性は単に因果関係を発見するだけであり、ある物事が我々を強く動かすことは、理性のなしいることではない。理性のみによつて

は、いかなる行動を生むことも、意欲を生じさせることもない。したがって、理性は、意欲の衝動を防止することもできない。いかなる情念や衝動を選ぶべきかを議論することもできない。理性は決して意志行動の動機ではなく、意志の規制に当って理性は情念に対立できない。

「理性は情念の奴隷であり、ただ奴隷であるべきである。情念に奉仕し従う以外の働きはできないのである。」(T.415)

ヒュームは以上のように結論したあと、理性について、動機としては情念に対抗できないが、実は理性にも大きな役割があることを指摘する。ヒュームは、情念と理性の闘争と呼ばれる事態、つまり情念と理性が相反するという事態は、以下の二つしかありえないとする。

「あまりにも明らかに自然なこの原則(情念が理性に反するためには誤った判断が伴わなければならないということ――筆者補足)によれば、ある感情が非理性的だと呼ばれうることはただ二つの意味においてのみである。第一に、希望や恐れ、悲しみや喜び、絶望や安心といった情念が、真実には存在しない事物の仮定に基づいていた場合である。第二に、

ある活動において情念を働かせる際、人が計画した目的に十分な手段を選び、原因結果の判断を誤る場合である。情念が誤った仮定に基づかず、目的のために十分な手段を選ばない場合、知性はそれを正当化も非難することもできない。」(T.416)

ある結果が見込まれている原因の仮定が誤謬だと発見されれば、その行動は直ちに私たちの関心をひかなくなるとヒュームは述べる。つまり、ヒュームは理性に、手段としての行為の決定には重要な役割を担わせている。ヒュームはここにおいて、実際には存在しない事物の仮定に基づいた情念を消去し、目的達成のための適切な手段を知らせるものとして、理性に大きな役割を与えている。

さらに、ヒュームは、通常情念に対抗する理性として人々に呼ばれているものは、実は「穏和な情念」(calm passion)だとする。穏和な情念とは、極めて静かに活動するので、一般的に理性と混同されているが、紛れもなく情念の一種という。しかし、理性も穏和な情念も特に目立った情感を生じずに活動するため、混同されやすいとヒュームは述べる。穏和な情念には二種類あり、ひとつは人間本性に自然に植えつけられた善意や憤慨や生命への愛や子どもへの親切さなどであ

り、もうひとつは善への一般的な嗜好と悪への嫌悪である。これらの情念のいずれかが穏和で、精神においてなんらの不調も生じないのであれば、その情念は理性の働きと混同されるとヒュームは述べる。

さらにヒュームは、穏和な情念のみでなく、激しい情念 (violent passion) も人間の意志に大きな影響を与えると指摘する。たとえば、ある人から害を受けると、人は怒み・憤慨の激しい情念を感じ、自分の喜びや利点となんら関係もなく、相手に対する災悪と罰を望む。

ヒュームは、理性や穏和な情念や激しい情念の、どれもが人間の意志に影響を与えることを述べる。人間は、しばしば自己の利害に反した行動を知りつつ取り、激しい情念に逆らって自分の利害や計画を追求する。その決定は、その人の一般的性格や現在の傾向による。

「心の強さと我々が呼ぶことは、激しい情念よりも穏和な情念を選ぶことを含意している。しかし、容易に観察できるように、常にこの美德を持ち、あらゆる情念と欲望の誘惑に屈する機会を持たないような人物はいない。」(T.418)

ヒュームはこう述べ、穏和な情念の望ましさを説きながら、

人間が容易に激しい情念に屈しやすい弱い存在だという見解を示す。ヒュームは、激しい情念に対抗することは困難であり、穏和な情念は容易に激しい情念に転じうることで、さらに習慣によって情念は増減することができると述べる。

そして、最終的に、以下のように議論をまとめている。

「激しい情念と穏和な情念の原因と結果は両方とも、かなり多様であり、かなりの程度において、あらゆる個々人に特有の性質や性向に依存する。一般的に言えば、激しい情念は意志においてより強力な影響を持つ。しかし、穏和な情念が、省察 (reflection) によって補強され、決意 (resolution) によって補佐された時、激しい情念をその最も荒れ狂う (furious) 活動の中において制御する (control) ことができることはしばしば見られることである。」(T.437~438)

ヒュームは、ここにおいて、穏和な情念が激しい情念を制御しうるものであることを述べている。人間の決意や理性は非常に不確実で脆いものであるが、熟慮と決意によって支えられた穏和な情念が、単に激しい情念によって左右されるだけでなく、激しい情念に打ち克ちうるものであるとされていることは、上記の記述から明白である。

次節では、ヒュームの上記の『人間本性論』中で展開された「理性」と「穏和な情念」についての議論が、どのように『エッセイズ』において発展させられたかを見て、ヒュームにおいて「穏和さ」が、「激しい情念」との対照で、望ましいものとされている様子を指摘する。さらに、ヒュームには政治経済について論じる時に、文明社会に対して明るい側面を描き出す楽天的部分と暗い側面を描き出す悲観的側面の二つがあるという「両義性」が指摘されてきたが、その問題を解決する鍵はこの「穏和な情念」にあることを示す。

### 第三節 現実と対峙する人間学

ヒュームは、一七四一年『道徳政治論集』(*Essays, Moral and Political*)を出版し、一七五二年には『政治論集』(*Political Discourses*)を出版した。両著作はヒュームが同時代の政治や経済について執筆したエッセイを集めたものであり、前者は主に政体論や党派論を、後者は商業経済や国債についての議論が主軸となっている。

ヒュームが生きた十八世紀のブリテンは、第二次英仏百年戦争と呼ばれるフランスとの対外戦争の時代でもあった。また、ジャコバイトの反乱が起り、コート・ウィッグとカン

トリーが激しい党派対立を起こしていた時代だった。

この時代状況において、コンヴェンションの概念に基づく政治思想を展開し、名誉革命体制を安定させ、ハノーヴァー朝に正当性を与え、党派対立の収拾を目指した、というのがフォーブズの「懐疑的ウィッグ」としてのヒューム解釈である。一方で、ポーコックにおける「両義性」の指摘にあるように、ヒュームにおいては、時にカントリーの主張と通底するような、当時の政権であるコート・ウィッグへの批判につながる公債論において、悲観的な危機意識も見られる。

本節では、ヒュームの『道徳政治論集』と『政治論集』(以下両冊を併せて『エッセイズ』と総称する)を、人間学に基づいた人間の穏和化を目指したものであったという観点から、商業経済を擁護し、当時の連続する戦争を批判した性格のものだったことを分析し、両義性と呼ばれることは実は穏和化の意図から結果されたことだったことを明らかにする。

『人間本性論』と『エッセイズ』は密接な関係を持っていた。

ヒュームは、もともと『人間本性論』第一篇・第二篇を出版したときに付していた「緒言」(advertisement)の中で、「もしも幸運にも上首尾であれば、私は進んで道徳学、政治学、文芸批評の考察に進もう」と述べていた。この約束は果たさ



れなかったが、人間本性の科学の一環として政治学を構想していたことを示す。『人間本性論』の序文においても、目指す諸学の完全な体系の中に、論理学・道徳学・文芸批評と並んで「政治学」(politics)を挙げている。

それでは、『人間本性論』に基づく政治学とは具体的にどのようなものだったのだろうか。それは、人間事象において「事物の一般的成り行き」を考察するものだった。

ヒュームは、『政治論集』の中の「商業について」の冒頭において、人類を「浅薄な思想家」と「深遠な思想家」の二種類に分ける。後者はきわめて稀だが、有益で価値があるとし、前者はコーヒーハウスの会話から学べることしか教えないような著者であり、あまり価値があるものではないと述べる。その違いは、個別的な主題を超えた、一般的な主題について精緻な推論をする能力にあるとした。

「一般的な推論は込み入って見えるが、その理由は単にそれらの推論が一般的だからである。人類の大半にとっては、非常に多くの個別の事柄において、すべての人が合意する共通の事情を識別したり、他の不必要な事情から、純粹に混ざらないようにそれを抽出することは、簡単ではない。それらの人々にとっては、あらゆる判断や結論は個別的なものである。

彼らは、普遍的な命題、つまり無数の個別的なものをそのもとに理解し、ひとつの定理において全科学を含むような命題に、自らの見解を拡大することができない。それらの人々の目は、そのような広大な見通しには混乱を起こしてしまう。そして、それ(広大な見通し)から得られた結論は、たとえば明確に表現されても、込み入ったほんやりしたものを感じる。しかし、それらの人々が込み入ったものだと感じようと、一般的原理が、もし正当で健全なものであれば、たとえ個別の事例では誤る場合があるとしても、常に事物の一般的な成り行きにおいて(in the general course of things)は優勢であることは確実である。そして、事物の一般的な成り行きを考慮することが哲学者の主要な仕事である。さらに、政治家にとってそれは主要な仕事だと、私は付言しよう。」(E253)

つまり、人間の世界には「事物の一般的な成り行き」が存在し、それを認識するのが哲学者・政治家であるというわけである。この箇所ではヒュームは『人間本性論』の中の「哲学者」と「大衆」の区分とはほぼ同じことを、「深遠な」思想家と「浅薄な」思想家の区別として述べている。原因と結果の連鎖を事物の一般的成り行きとして精密に観察できることが、



大衆と異なる哲学者や政治家の任務というわけである。

ヒュームはまた、「政治を科学に高めるために」の中においても、人間の出来事が個別の人間の偶然的気質や性格からのみ帰結するという見解に異論を唱え、個別の事例や統治者個人の気質や性格をのみ対象とするのではなく、特定の個人や事例に依拠しない事物の一般的な成り行きを、政体の分析を通じて考察できると主張している。

ヒュームが「事物の一般的成り行き」として特に分析したのは、政治における政体の影響と、経済における商業経済の発展だった。ヒュームは、「商業について」および「技芸の洗練について」において、商業や技芸の発展こそが人間本性に適合的であり、公共の力を結果として強めることになり、勤労・知識・人間性が相互連鎖的に発展すると述べている。農業のみが存在する社会と異なり、奢侈や技芸の洗練こそが、農業従事者にとっても勤労の動機・誘因となり、農業生産力を向上すると説く。商業が人間の勤労の動機となるということは、情念のみが人間の動機となるという『人間本性論』の議論を受けたものであることは容易に見てとれよう。

しかし、ヒュームは「商業について」と「技芸の洗練について」で上記のような文明社会の自律的發展と明るい側面を述べたのち、「公信用について」などにおいて、繰り返し国債

が政治経済に対して破滅的な作用をもたらすことを指摘する。そのことは、ヒュームにおける「両義性」の問題として指摘されていることはすでに述べてきた。

ヒュームは、「公信用について」の中で、国債 (national debt) を、破滅的な慣行として批判する。ヒュームは国債の害悪として以下の五つの点を挙げる。一、国債が人々と富を首都ロンドンに集中させる。二、インフレを起こす。三、増税が貧民への圧迫を招く。四、外国人の国債所有が増えれば属国化。五、不労所得による生活を助長する。

さらに、ヒュームは増税には限界があり、内国消費税の課税が限界に達し、他の増税に踏み切らねばならなくなった場合の貧民の苦悩を説く。そして、「国民が公信用を破壊するか、公信用が国民を滅ぼすか」(E:360)とまで述べる。

森直人は、ヒュームの「公信用について」の議論を、最終的に公信用の死を説くことによって、正義と統治の衝突と統治優先のロジックを導入していると位置づける<sup>(13)</sup>。たしかに、そのようにヒュームをとらえることは可能であるが、ヒュームが「公信用について」の末尾で述べる、自国内部の決断および他国の征服による公信用の「死」を実際にどの程度現実味のあるものとして想定していたかは若干疑問である。

たとえば、森は、「公信用について」との関連で、ヒューム

の「勢力均衡について」を考察し、「勢力均衡について」がフランスの世界君主制に対抗するためのものであったとする<sup>(14)</sup>。たしかに、ヒュームが現実問題として、フランスの膨張を封じ込めるための政策の必要性を説いていることはそのとおりである。だが、一方でフランスへの敵意の過剰を戒めている。

さらに、戦争の半分以上、さらにはすべての国債は、不必要なものだったとまで述べる。

「我々のフランスとの戦争は正義と、さらにおそらくは必然性にさえよって始まったのだが、常に頑迷さと情念のためにあまりにも極端に押し上げられた。…(略)…したがって、以上からわかるように、我々のフランスとの戦争の半ば以上、そしてすべての我々の公信用は、隣国の野心によるよりは我々自身の無思慮な激しさに多くよっている。」(E:339)

上記の記述から、ヒュームの「勢力均衡について」は、単なるフランスに対する勢力均衡に基づいた封じ込めを意図した論文というだけではなく、フランスとの戦争における国民世論の熱狂を適切に鎮静化させる狙いがあったと言える。

ヒュームの主眼目は、当時の頻発するフランスとの戦争と戦争を支えるための国債の膨張に対する批判にあったと言え

る。ジョン・ブリュアは、十八世紀ブリテンの政府を「財政軍事国家」と位置付け<sup>(15)</sup>、十八世紀ブリテンの歴史を戦争遂行能力の大幅な向上がなされた時代だったとし、強力な軍隊とそれを支えるシステム、特に巨額の戦費の調達のための国債と国債を維持するための税収増が図られた時代だった、いわば「戦時経済」だったことを描き出している。

ブリュアによれば、国家の年間支出は一六八〇から一七八〇年の間に十五倍に増え、年歳入の七五から八五%は軍事費と債務に費やされ、国債費は税収の三十から四十%を占めた<sup>(16)</sup>。一般的なイメージでは、フランスが重税のあまり革命まで起こる事態となったのに対し、イギリスの一八世紀は安定した国民負担の少ない政府だったかのように思われがちだが、実はイギリスの方がフランスよりも国民の税負担は重かったという。ヒュームの上記の議論は、こうした歴史的文脈から見れば、この「財政軍事国家」への批判だったと言える<sup>(17)</sup>。

では、こうした、コート・ウィッグの政策への批判者としてのヒューム像と、「懐疑的ウィッグ」としてカントリーのボリングブルックを批判したヒューム像は、どのような整合性を持ちうるのだろうか。その点について、当時の歴史的文脈を見れば、以下のように理解できる。

一七二〇年代以降、長期政権を担ったウォルポールは、地

租を引き下げ、エクササイズ（内国消費税）を拡大した。そのことによって、地主の負担を減らし、税負担を中間層を主とする一般国民に広く担わせた。この政策は、地主階級を体制に取り込む政策を推進し、さらに地主階級が公債権者となる事態を促進した。ボリングブルックがかつて描いた国債に依拠する金融勢力と土地に依拠する地主階級の対立、および戦時財政のもとでの地主階級の没落という画像は、これらの政策によってすでに色あせた過去のものとなっていた。<sup>(18)</sup>つまり、ボリングブルックの議論は、当時のブリテンの歴史的現実への批判の有効な根拠とはなりえなくなっていた。

ヒュームは、ボリングブルックが擁護しようとした地主階層とは別に、商工業からなる中間層を、ブリテンの実質的な自由や富の担い手として重視し、擁護しようとしていた。もともと、ヒュームが商業や奢侈を擁護肯定する理由は、それが人間のさらなる勤労の動機になるというのみではなく、富の平等や中間層を商業や奢侈が生み出すことにあった。

「市民 (the citizens) の間における (富の — 筆者補足) 過度の不平等は国家を弱体化する。できれば、全ての人が自身の労働の成果を享受し、必需品については全て所有し、また生活の便宜品に関してはその多くを所有するべきである。そ

のような平等が人間本性に最も適っていること、そしてそれ（平等）が貧民の幸福を加える度合いの方が、富者の幸福を減らすことよりも大きいことは、疑いない。それ（富の平等）はまた国家の力を増大させ、より自発的に (cheerfulness) 大きな税や負担を支払うようにする。：（中略）：これに加えて、少数の手中に富があるところでは、それら少数者は全ての権力を享受し、すぐに共謀して全ての負担を貧者に置こうとし、より一層圧迫し、全ての勤労 (industry) を意気消沈させるにちがいない。」(E.265)

ヒュームにおいては、農業を中心とした封建社会よりは、はるかに商業社会の方が公的自由にも適したものとして受けとめられていた。そのことは、土地所有を公的な自由の基礎としたボリングブルックとは確かに異なる見解だった。ヒュームは、商工業の中産階級こそ、公的な自由の担い手となると考えた点で、カントリーとは大きく異なっていた。

「しかし、奢侈が商業と勤労 (industry) を育むところでは、農民は、土地の適切な耕作によって、豊かになり独立する。一方、商工業者 (tradesmen and merchants) は、一定の割合の富を獲得し、公的自由 (public liberty) の最も良い、最

も堅固な基礎となる中産階級 (middling rank of men) に権威と尊敬をもたらす。これらの人々は、貧困と精神の卑劣さから、農民のように隷従に甘んずることはない。また、満足を求めるために主権者として専制に加わることはない誘惑されず、豪族 (barons) たちのように他人に圧制を加えようという望みもない。彼らは、財産を保護し、貴族 (aristocratical) と君主の圧制から彼らを守る、平等な法を切望する。」(E277~278)

しかし、国債に対して批判を行うという点では、ボリングブルックらカントリーと同じであった。ヒュームにおいては、国債は中間層を消滅させ、自由を破壊するものであった。

「〔公信用が支配する社会においては——筆者補足〕暴政に抵抗する手段は全く残らない。選挙は贈賄と腐敗によってのみ左右される。そして国王と人民の間の中間権力 (middle power) は完全に除去されてしまい、つらい専制が必ず支配する。」(E338)

中間権力の消滅した社会は、自由が消滅する専制支配の社会だとヒュームには受けとめられていた。また、公信用・国

債が蔓延する社会は、必然的に中間権力の衰退を招くとヒュームは認識していた。さらに、公信用・国債は戦争によって引き起こされる事態だとヒュームは洞察し、指摘していた。

ヒュームの他のエッセイにおいても、戦争は基本的に否定的に描かれる。たとえば、「いくつかの注目すべき慣習について」の中においても、当時のイギリスにおいて行われていた強制的な水兵徴募の習慣を批判している (E320)。また、「古代人口論」の中においても、古代における奴隷制と戦争が人口に関していかに破滅的な影響を与えていたかを推論している。「新教徒による王位継承について」においても、ヒュームはカトリックの信仰を持つスチュアート家よりもおおむねプロテスタントのハノーヴァー家を支持しながら、大陸での戦争にブリテンが巻き込まれる原因となりうることをハノーヴァー家に固有の問題とし、ブリテンの君主が国外領土を持たないことが望ましいと論じている (E369)。

上記のことを踏まえれば、ヒュームは『人間本性論』において確立した「穏和な情念」と「理性」を重視する立場から、激しい情念によって生じる不必要な戦争を避けること、そしてそのために正確な政治経済への認識能力を人々が持つことを目指していたと言える。

## 結論

ヒュームは一方で当時のブリテンにおける名誉革命体制や商業社会を擁護しながらも、もう一方で当時のブリテンにおける現実であった「財政軍事国家」への鋭い批判者だった。ヒュームは人間学を根拠に、社会の具体的な現実の中における「穏和な情念」を推進し、そのために「財政軍事国家」の制御不能な暴走とそれによる破局を回避しようとした。

このことは、ヒュームの政治思想が、「作為」の精神を通して社会秩序を新たに構想し人間の自由を目指す社会契約説とはまた異なった方法や論理を通じて、当時の政治的な現実に対して必ずしも現状追認とは言えない、「人間学」を駆使しての格闘を意図した政治思想だったことを意味する。もっと言えば、単なる現状維持の保守主義にとどまらない、人間の主体性を賭した内容を持った政治思想だったと言える。

ヒュームの『人間本性論』は、道徳を説くものではなくて道徳の心理学的分析を行ったものであるということとは従来指摘されていることであり、<sup>19)</sup>そのことには筆者も異論はない。しかしながら、上述のとおり、ヒュームは「理性」と「穏和な情念」に対して、以下の二つのことを述べていた。

(1) 理性は、誤った因果判断を克服し、目的を達成する手

段を正しく認識する力を持つ。

(2) 人間に動機を与えるのは「情念」であるが、「情念」には「穏和な情念」と「激しい情念」の二種類がある。後者が人生や社会の混乱や悲劇を招くのにに対し、前者は人々が通常「理性」と呼ぶところの、人間に安定や節度を与えるものであり、ヒュームは前者を重視した。

上記の観点から、ヒュームはその政治思想において、可能な限り社会の穏和さを推進することを模索していた。政治社会の穏和さの維持や推進に関する意図的な戦略という点で、ヒュームの政治思想は単なる現状追認にはとどまらない内容と性格を持つものであり、「両義性」と指摘されていたことはべつに矛盾や曖昧さではなく、一貫したヒュームの戦略だったと指摘できる。

ホブズが「知」によって政治的秩序の安定と平和を目指したのに対し、ヒュームは「情」つまり穏和な情念によってそれを目指したものだと言いうこともできよう。

なお、本稿においては、ヒュームのもう一つの主著である『イングリランド史』への十分な検討を行えなかった。ヒュームは「理性」と「穏和な情念」により適合的でより実現された政治社会の状態を、歴史的現実の中での「自由」として分析・擁護していたことを明らかにすることを今後の課題とし

たい。

# 注

- (1) 福田敏一『近代政治原理成立史序説』(岩波書店、一九七一年)一三七頁。および、同著『政治学史』(東京大学出版会、一九八五年)四四〇頁。なお、ヒュームを「革命的な哲学と保守的な政治学」と位置付けたものとして、David Miller, *Hume's Political Thought*, Oxford University Press (1981) p.187 参照。
- (2) ポーコック、田中秀夫ほか訳『徳・商業・歴史』(みすず書房、一九九三年)一四九頁および第七章。
- (3) Duncan Forbes, *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge University Press (1975) Chap5.
- (4) 坂本達哉『ヒュームの文明社会 ― 勤労・知識・自由』(創文社、一九九五年)三七三頁。
- (5) 犬塚元『デイヴィッド・ヒュームの政治学』(東京大学出版会、二〇〇四年)二八五頁。
- (6) 森直人『ヒュームにおける正義と統治』(創文社、二〇一〇年)二二一頁。
- (7) ラスキ、堀豊彦ほか訳『近代イギリス政治思想II』(岩波書店、一九五八年)第四章。
- (8) ハーシュマン、佐々木毅ほか訳『情念の政治経済学』(法政大学出版局、一九八五年)。
- (9) 佐々木毅『ヒュームと公共精神の問題』『思想』七六〇号。

- (10) 舟橋喜恵『ヒュームと人間の科学』(勁草書房、一九八五年)一八二頁。
- (11) ラブジョイ、鈴木信雄ほか訳『人間本性考』(名古屋大学出版会、一九九八年)二〇三頁。
- (12) 泉谷周三郎『ヒューム』(研究社、一九九六年)一三三頁。
- (13) 森直人、前掲書、二二一頁。
- (14) 同、一八四頁。
- (15) ジョン・ブリュア、大久保桂子訳『財政―軍事国家の衝撃』(名古屋大学出版会、二〇〇三年)六頁。
- (16) 同、四九、五〇、一二三頁。
- (17) アーミティジ、平田雅博ほか訳『帝国の誕生』(日本経済評論社、二〇〇五年)二六二頁。
- (18) 大倉正雄『イギリス財政思想史』(日本経済評論社、二〇〇〇年)三三七、三四〇頁。
- (19) Russell Hardin, *David Hume: Moral and Political Theorist*, Oxford University Press (2007) p.28.